

学年のチーム力を育てる組織運営に関する研究 —学習指導をコアとした学年協働体制の 仕組みづくりを通して (第6学年の実践) —

Research on the Management of Schools to Develop Teamwork Skills
within a Grade — Improving Grade Collaboration as a Focus within
Education Guidance (Practice in the Six Grade) —

神 代 純 子

森 保 之

Junko KOJIRO

Yasuyuki MORI

福岡教育大学大学院教育学研究科

福岡教育大学

教職実践専攻学校運営

教職実践研究ユニット

リーダープログラム／

那珂川市立安德南小学校

(令和6年9月2日受付, 令和6年12月23日受理)

要 約

本研究は、学年内に学習指導をコアとした学年協働体制を位置づけ、学年運営のマネジメントを行っていく仕組みづくりを通して、学年のチーム力を育てる組織運営の在り方を究明していくことを目的としている。そこで、学習指導体制による様々な授業形態の実施を行い、学年会で授業について提案・相談・アドバイスをを行う仕組みづくりを行った。また、学年経営案の活用や、部会共有シートを活用した部会と学年会の連動を図り、学年協働体制における学年運営のマネジメントを第6学年を中心に行った。

その結果、第6学年の構成員の学年運営への参画意識が高まり、目標の共有、協働的な実践、実践における評価・改善を主体的に行う学年運営が展開され、学年のチーム力を育てることができた。

キーワード：チーム力, 目的共有, 相互作用, 価値創造, 学年協働体制, 学年運営のマネジメント

1 主題設定の理由

(1) 社会の要請から

近年の社会の急速な変化や子供たちの多様化に伴い、学校教育の役割は拡大している。その一方、教師不足の現状から、学校運営面や教育内容の質の維持向上の面で課題がある。そのような状況の中で、令和4年12月の中央教育審議会答申の中では、「子供たちの学び（授業観・学習観）とともに教師自身の学び（研修観）も転換し、『新たな教師の学びの姿』（個別最適な学び、協働的な学びの充実を通じた、『主体的・対話的で深い学び』）を実現」¹⁾と述べられている。ま

た、「学校管理職のリーダーシップの下で、目標の明確化、心理的安全性の確保、教職員の経歴・背景の多様性を考慮したマネジメントも不可欠である。特に『心理的安全性』の確保は、様々な課題に対応できる質の高い教職員集団を形成するために不可欠である」²⁾といった多様化した教職員集団のマネジメントについても述べられている。

那珂川市においても、学校教育の重点として「専門性の高い教職員の育成」「ICT教育の推進等による確かな学力の育成」「令和4年度より高学年における学級担任間の交換授業の推進」を掲げている。この主題で実践に取り組むことは、社

会の要請を踏まえると共に、那珂川市の要請に応えるものである。

(2) 研究協力校（在籍校）の実態から

研究協力校は、児童数 569 名、教員数 35 名の中規模校である。学級数は、24 学級で、各学年 3 学級と特別支援学級が 6 学級ある。今後、若年・中堅教員の育成が課題となってきた。また ICT 教育の推進などに伴い、どの年齢層においても学びの場が必要である。さらに児童の学力格差や配慮を要する児童の増加といった実態から組織的に対応することが必要である。このようなことから、在籍校の経営課題の 1 つとして「学年チームの指導体制の構築」が挙げられている。

そこで、学年の構成員の学年運営への参画意識を高め、学年で相互補完し合うことができる学年協働体制の仕組みづくりを行うと共に、学年運営のマネジメントを行うことで、学年のチーム力を育てることを目的として、本主題を設定した。

2 研究主題・副題の意味

(1) 「チーム」とは

福岡県教育センター「学校変革の決め手学校のチーム化を目指すミドルリーダー 20 の行動様式」の中では、次の 3 つの条件を満足させる教員集団のことであると述べてある。³⁾

- 目的共有の面から・・・重点目標や経営の重点を理解して共通実践に取り組もうとする教員集団になっている。
- 相互作用の面から・・・共通実践における成果や課題を積極的に交流し自他の取組や改善に生かそうとする教員集団になっている。
- 価値創造の面から・・・共通実践に新たな発想やアイデアを付加して、よりよい実践をつくろうとする教員集団になっている。

(2) 「学年のチーム力」とは

学年集団の構成員がもつ自律性が、学年の様々な取組で生かされることにより、すべての構成員が学年運営への参画意識をもち、目的共有、相互作用、価値創造という望ましい変容がもたらされる学年集団の総合力のことである。

(3) 「学年のチーム力を育てる組織運営」とは

学校教育目標を達成するために、学年集団の構成員が個々の能力を発揮し任された役割を遂行し、相互補完しながら協働して学年運営に参画することができるよう、マネジメントすることである。

(4) 「学習指導をコアとした学年協働体制」とは

曾余田（2010）は「学校教育目標の目的を達成するためには個々単独の力量のみに頼るのは限界

だ」⁴⁾と述べている。元兼（2010）は「組織力の妙は共有された目標に向かって異質な個人がその『もち味』を出し合うことにより個々人の力総和以上のことを発揮することにある」⁵⁾と述べている。

この論に基づき、次のような仕組みを構築した。学習指導をコアとした学年協働体制とは、学年内に「学習指導体制部」「ICT 活用部」「学力基盤部」といった学習指導に関わる 3 つの担当を位置づけ、学年のすべての構成員が主務者となる役割をもつ体制のことである。学習指導体制部は学年主任が担い、様々な授業形態の実施に向けての運営や学年会の運営を行う。授業については、学年会の中で提案、相談、アドバイスを行うと共に児童の様子も共有する。ICT 活用部や学力基盤部は、各部会の内容を学年に周知したり、部会の中で学年の実態や取組を報告したりする。また、学年の課題を踏まえて積極的に取組を提案する。

(5) 「学習指導をコアとした学年協働体制の仕組みづくり」とは

学年協働体制において、学年会と各部会のそれぞれのマネジメントを行うとともに、2 つの会を連動させていくといった学年運営のマネジメントを行うことである。

3 研究の目的

学習指導をコアとした学年協働体制の仕組みづくりを通して、学年のチーム力を育てる組織運営の在り方を究明する。

4 研究の仮説

学年運営において、「学習指導体制部」「ICT 活用部」「学力基盤部」の 3 つの協働体制をつくり、学年運営のマネジメントを行っていけば、目的共有、相互作用、価値創造という望ましい変容が学年組織にもたらされ、学年のチーム力を育てることができるであろう（図 1）。

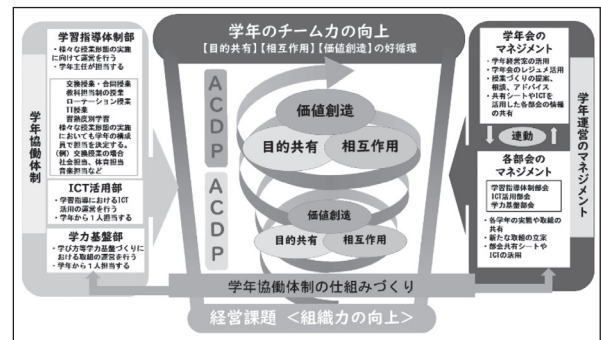


図 1 研究構想図

5 仮説説明のための具体的方策

(1) 学習指導体制による授業の実施における学年運営のマネジメント

- ①学習指導の体制づくりと学年会の運営改善
- ②学習指導体制部会でのマネジメント

(2) 学年協働体制における学年運営のマネジメント

- ①学年経営案を活用した学年運営
- ②3部会の体制づくりと部会の運営
- ③部会共有シートやICTを活用した部会と学年会の連動

6 研究の実践

本研究の対象とした第6学年の構成員は3名で次のような実態である（表1）。

表1 第6学年の構成員の実態

A 教諭（教員歴38年目のベテラン教員）
・学年主任としての経験が豊富。
・多様な児童への対応やICT活用に難しさを感じている。
B 教諭（教員歴6年目の若年教員）
・校務分掌では、ICT活用部長や主題研修の算数部長を担っている。
・初めての6年生担任であり、授業や行事に関わる見通しが持てず不安もある。
C 教諭（教員歴5年目の若年教員）
・2回目の6年生担任であり、以前受け持った児童であることから、学級経営における不安は少ない。
・2年間の育休をとっていたので、現場での経験は実質3年間である。自分には強みがなく、学年や学校に貢献できないのではないかと感じている。

このように経験年数や立場に違いがある3名の構成員からなる第6学年において、どのような仕組みづくりや学年運営のマネジメントを行っていったら学年のチーム力が育っていくのかを検証していった。また、本研究は市の要請である「高学年における交換授業の推進」を視野に入れた研究であることから第6学年での検証は不可欠であると考え、本研究での対象学年とした。さらに、学年主任としての経験が豊富なA教諭の学年運営の実践を他の学年にも広めていくことで、他学年の学年のチーム力も育ち、学校全体の組織力の向上につながると考えた。

以下、第6学年の実践を述べる。

(1) 学習指導体制による授業の実施における学年運営のマネジメント

- ①学習指導の体制づくりと学年会の運営改善

第6学年は年度当初から社会、体育、音楽の交換授業、道徳科のローテーション授業、教科担当制の授業など様々な形態での授業を行った。また、授業の実施においては、学年会の中で授業の

ねらいや流れについて提案・相談・アドバイスを行っていった。教科担当制の授業においては、6年目のB教諭が算数科「円の面積」について作成した資料（図2）を基にねらいや流れを説明していた。

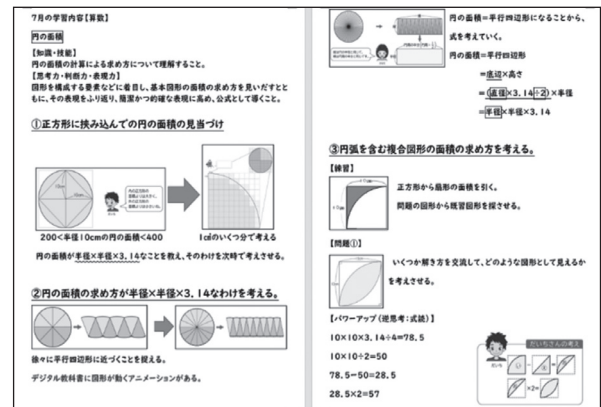


図2 担当教科についてB教諭が作成した資料

説明を聞きながら、5年目のC教諭から次のような質問が出され、B教諭がアドバイスをしていた（表2）。

表2 学年会（R5年7月6日）の会話の内容（一部抜粋）

(C教諭) 問題①に取り組む時は、練習で使った図を配付して重ねながら考えさせてもいいですか。
(B教諭) たしかに実物を重ねてもできるけれど、この場合、 <u>既習図形を探して図形を求めていくような見方を育てることが大事ではないか</u> と思います。
(C教諭) なるほど。分かりました。

この後も、C教諭の質問に対して、B教諭は自分が実践した授業の板書をタブレットで提示しながらC教諭に丁寧に説明していた。また、学年主任のA教諭も共感的に2人の話を聞きながら一緒に学び合う姿が見られた。

交換授業においても、5年目のC教諭が、担当している外国語について、作成した資料（表3）を基に授業のねらいや流れを説明していた。

表3 C教諭が作成した外国語の資料（一部抜粋）

6年外国語 10月の学習内容
Unit5 We all live on the Earth.
<授業内容>
①② 生き物の暮らしについてやり取りのおおその内容を理解する。
③ 生き物がどこで暮らし、何を食べているのかについてたずね合う。★
④ どんな生き物が何を食べるのか、食物連鎖を意識して考える。★
⑤⑥ 食物連鎖ポスターをグループ毎に作成する。★
⑦ グループ毎にプレゼンテーションを行う。★
⑧ 絶滅危惧種など環境について考え、世界日本の文化に対する理解を深める。発音アルファベット練習を行い、ペーパーテストを行う。★
○ ★は評価に関わるところです。内容が少し難しい為、個人ではなくグループ毎に作成しようと思っています。
○ 3人1組に分け、グループ毎に別の食物連鎖を考えさせ発表させようと思います。

また、授業の流れだけではなく、C教諭は「今回の外国語のテーマは児童にとって難しいテーマなのでグループでさせようと思っていますがどうでしょう」と相談をしていた。それに対しA教諭やB教諭が「自分のクラスにも外国語を話すことに苦手意識をもっている児童がいる」「グループ学習のほうが学びが保障できる」といったように、実態を踏まえた授業の方向性を示し、担当者任せにしない姿がうかがえた。

学習指導体制における授業の実施において構成員は次のような感想を述べている（表4）。

表4 第6学年の構成員の感想

(学年主任 A 教諭)
・各学級の児童の様子や学級経営のよさがよく分かる。 学年で児童を育てることにつながる。
(6年目 B 教諭)
・自分の担当教科について学年会で提案するので、 <u>単元を見通して教材研究を深めるようになった。</u>
(5年目 C 教諭)
・授業について学年会で相談できるので、安心して授業に臨める。

A教諭の感想からは組織的な生徒指導につながっていることが分かる。B教諭の感想からは授業力の向上につながっていることが分かる。C教諭の感想からは教師が安心して授業に臨めることで、余裕をもって児童に関わることができると考ええる。

以上のような第6学年の学年会の姿や構成員の感想から、学習指導体制における授業の実施と学年会の運営改善は、目的共有や相互作用をもたらし、児童の学力面、生徒指導面にもよい影響を及ぼしていると考ええる。

②学習指導体制部会でのマネジメント

学習指導体制部会は各学年主任で構成されている。部会では、年度当初に筆者が、学年会のレジュメの中に授業の進め方や児童の様子についての項目を設けることを学年主任に周知し、学年会の中で授業について提案・相談を行ったり、児童の様子を情報交換したりすることができるようにした（図3）。

6月の部会では、学年会の進め方の工夫について話し合った。第6学年のA教諭は、「授業の内容や児童の様子について話す時間を学年会で必ず確保するようにしている」「担当者が授業のねらいや流れをまとめた資料を作成し、学年会の中で提案している」ことを述べていた。部会后、他学年の学年主任は次のような感想を述べていた（表5）。

このような感想から、第6学年の学年会の工夫点を中心に互いの学年会の在り方を部会で共有し

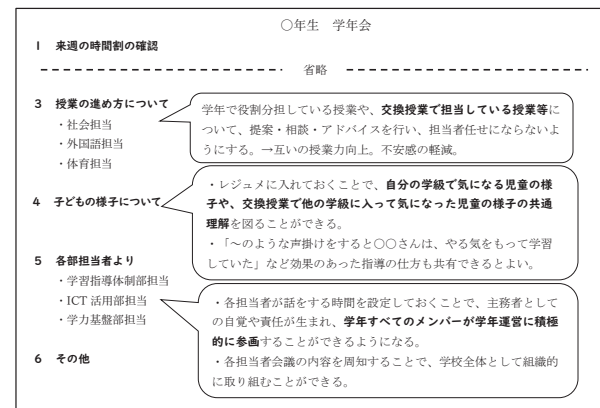


図3 学年会のレジュメ（例）（一部抜粋）

表5 部会後の学年主任の感想（一部抜粋）

・6年生が実施しているように、 <u>翌月の授業の流れを話し合う時間の位置づけや、教科を固定しての交換授業を取り入れていきたい。</u>
・他の学年の学年会の進め方を聞いて、 <u>学年会で取り上げる内容、時間配分について見直していきたいと思う。</u>
・この部会に参加をすると刺激を受ける。 <u>A教諭が若年教員に任せながら学年運営を行っていることはすごい。</u> 学年のチーム力向上をめざして頑張ろうと思う。

たことは、学年間に相互作用をもたらしたと共に、学年主任のモチベーションの高まりにもつながっていると考える。

7月の部会では、学習指導体制における授業の進捗状況や成果を共有することで、学年会での授業の提案や相談の充実を図ったり、第6学年のように様々な授業形態に挑戦したりする学年が増えていった。このような姿から、学習指導体制部会のマネジメントを行ったことは、各学年に相互作用や価値創造を生み出していると考ええる。

(2) 学年協働体制における学年運営のマネジメント

①学年経営案を活用した学年運営

学年経営案を日常的に活用できるよう、筆者が管理職と相談の上、項目に3つの協働体制を位置づけたり、具体的な取組を記入したりする学年経営案の形式を作成した。次に、学年経営案評価表を作成し、定期的に数値による振り返りを行ったり成果や課題を話し合ったりできるようにした。

図4は、第6学年の学年経営案評価表の一部である。具体的な取組には、「何のために行うのか」「だれが行うのか」「どのように行うのか」「いつ行うのか」が記されている。このような学年経営案を作成することで、構成員が学年運営への参画意識をもち、見通しをもって取組を進める姿がうかがえた。また、学年経営案の振り返りでは次のような会話がなされていた（表6）。

項目	重点目標達成のための具体的な取組	何のために	5月
学習指導体制	各担任の専門性を生かすと同時に児童の共通理解・指導を進めていく。 国語(A教諭) 社会(A教諭) 算数(B教諭) 理科(C教諭) 音楽(C教諭) 体育(B教諭) 図工(A教諭) 総合(A教諭) 道徳(B教諭) 外国語(C教諭)		4
ICT活用	ICT活用部部長であるB先生を中心に、学習に積極的にICT活用場を設定し、内容を深めるとともに、子ども達のICT活用能力を高めていく。		3
学力基盤づくり	担当教科の提案資料の中に学習過程も位置づけ、考えを表現し深める活動を進めていく。		3.5
学年協働体制	週始めの学年会で次週の予定や仕事の分担、月単位での学習内容や指導方法の確認などを行い、学年全体で子ども達の指導育成にあたっていけるようにしていく。		4

図4 第6学年の学年経営案評価表（一部抜粋）

表6 学年会（R5年6月3日）の会話の内容（一部抜粋）

(A教諭) 学年経営案のICT活用についてはどうでしたか。 (C教諭) 私はあまり活用できていません。今後、交換授業の外国語で学習支援アプリを使っの発表場面を仕組みたいと思います。 (B教諭) 6年生では、どこまでICT活用能力を育成しないといけないのかを明確にする必要がありますね。部会で相談してみましょう。 (A教諭) 学年チームの協働体制についてはどうでしたか。 (B教諭) 互いの授業を参観したり、指導方法を話し合ったりしたことで、授業の進め方の共通理解ができました。 (C教諭) 学年会の時に気になる児童のことを考えることができ、学年全体で児童理解が進んだと思います。
--

会話の内容から、学年経営案を基に成果や課題、課題解決への方策等を積極的に述べ合う姿がうかがえた。このことは、学年全員で目的共有がなされた姿であると考ええる。

第6学年のように、どの学年においても学年経営案を活用し学年運営を進めていったので、8月に全職員で「学年のチーム力に関する進捗状況報告会」を実施した。各学年からの報告を行い、互いの学年のよさを共有した。その後、筆者が「チーム力のめざす姿」の共有を行い、最後に大学教授より各学年の実践の価値付けを行ってもらった。

報告会后、表7のような感想が書かれていた。

表7 進捗状況報告会後の職員の感想（一部抜粋）

・チーム力がある学年、学校は楽しくやりがいもあるし、それが子どもたちの成長に大きくつながっていく。心して実践していきたい。(6年生)
・日頃行っていることを自分の中で改めて価値づけることができた。今後もチームの一員として仕事をしていきたい。(他学年)

学年経営案を基に、研究の中間地点で報告会を行ったことは、全職員の学年運営への参画意識を高めることにつながったと考える。

②3部会の体制づくりと部会の運営

学年内に学習指導体制部、ICT活用部、学力

基盤部を位置づけ、すべての構成員を主務者とする仕組みを作った。そして、月に1回程度同日に3部会を行った。各部会には部長を位置づけ、筆者と相談して、各部のメンバーの意見を吸い上げながら、部会の内容を決定していった(表8)。

表8 各部会の会議の内容（一部抜粋）

月	学習指導体制部会	ICT活用部会	学力基盤部会
4月	・学年経営案の共有 ・学年会のレジュメ作成	・児童のタブレット使用時のきまりについての共有・協議	・安徳南小スタンダードによる学び方の共有
5月	・学習指導体制における授業の計画	・デジタル教科書の効果的な活用の仕方	・家庭学習について
6月	・学年会のレジュメを活用した学年会の進め方の工夫	・市のICT指標を基にしたICT活用能力の系統性	・重点目標「進んで表現」に向けた取組について
7月	・学習指導体制における授業の成果や課題	・夏休みのICT研修会の準備等	・第1回南っ子先生計画・準備

部会の運営を進めていく中で、部会の内容を学年に周知したり、学年の取組を部会に報告したりすることはできてきた。しかし、部会の内容を生かしながら学年に取組を提案していくまでには至っていないという課題もあった。そこで、部会の中で学年に提案する内容も考えることができるような会の流れを工夫した。その結果、年度当初「自分に強みがなく、学年に貢献できない」と感じていたC教諭も、学年会で、自分が考えた案を提案することができていた。

また、学習指導体制部会でも「学年のメンバーの強みを生かしたり、全員が積極的に意見を述べ合ったりできていない」という課題が出された。

そこで、必要に応じて筆者が資料提示を行い、学年主任のファシリテーション力が高まるようにしていった(図5)。

以上のようなことから、3部会の体制づくりと部会の運営を行ったことは、すべての構成員の学年運営への参加意識を高め、学年運営において自分の役割を遂行する姿につながったと考える。

③部会共有シートやICTを活用した部会と学年

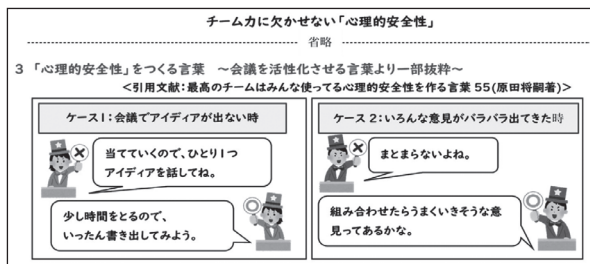


図5 学習指導体制部会で提示した資料（一部抜粋）

会の連動

各部会の部長と筆者で「部会共有シート」を作成した。共有シートには、各学年の主務者が必要な情報を書き留めておくようにした。また、各部会の記録係が会議の全体的な内容を共有シートに記録し議事録とした（表9）。

表9 ICT活用部会の共有シート（一部抜粋）

会議内容	<p>2 学習支援アプリの活用状況について</p> <p>1～3年及び5・6年では活用ができていない。</p> <p><4年>夏休み明けから新聞作成で活用</p> <p><特支>職員間では活用していても児童の学習での活用は学級間で差がある。</p> <p>【学習支援アプリの強みについて】</p> <p>① 児童がリアルタイムでの進捗状況がわかる。</p> <p>② 1つのシートにグループの子どもが一斉に書き込める。</p> <p>☆中学校で活用しているの、小中連携の点から活用しておく必要がある。</p> <p>3 今後 ICT 研修会で実施してほしいこと</p> <p>(3年生) 各学年でどこまで教えればいいのかわからないので、担任や学年によって差がある。系統性がわかるカリキュラムのような物を全体で共有してほしい。</p> <p>(5年生) 子どもの立場で受ける研修が多かったため、教師側でどんな活用方法があるか教えてほしい。</p>
------	--

議事録はタブレットで共有し、学年会の時に全員が見ることができるようにし、部会の内容を共有できるようにした。

以下、部会と学年会の連動についての第6学年の実践について述べる。

学年会では、各部会の主務者が、部会の内容を共有シートを活用して周知していた。また、学年会のレジュメの中に「3部会の担当者より」という項目を設けていることで、部会後に内容を周知するだけではなく、日常的に取組を提案することもできる仕組みができていた（資料1）。

ICT活用部会では「ICT活用については、学年の系統性が必要なので、市の指標を基に学年で実践を行っていきましょう」ということが提起された。そこで、第6学年の主務者のB教諭

資料1 学年会での部会の内容の周知、取組の提案の様子



は「中学校でよく活用されている学習支援アプリを使って授業を仕組みましょう」「修学旅行での学びは、児童がタブレットでプレゼンテーション資料を作成しましょう」といったことを提案していった。その結果、どの学級の児童もICTを積極的に活用しながら学習する様子が見られた。10月に実施した児童による授業アンケートの項目「タブレットやパソコンなどを使って情報通信ネットワークを活用したことで、問題の解決に必要な情報を調べることなど、自分の考えを広げたり、深めたりすることができた」においては、4件法で3.56という高い数値結果であった。6月の段階では「児童のICT活用」が課題であったが、部会と学年会の連動を図ることで、課題解決を図ることができた。さらに、実践についてB教諭はICT活用部会の中で報告を行った（資料2）。B教諭の報告内容については、部会共有シートで共有し、他学年の主務者が自分の学年へと広めていくことができた。

資料2 ICT活用部会で6年生の実践を報告する様子



学年運営について、第6学年の構成員は次のような感想を述べている（表10）。

表10 第6学年の構成員の感想

<p>(学年主任 A 教諭)</p> <p>若年教員2人から学ぶことも多い。指示をしなくてもそれぞれが自律的に動いてくれている。</p> <p>(6年目 B 教諭・ICT活用部)</p> <p>部会でICT活用について学年の系統性を明確にしたので、学年でも見通しをもって取り組むことができた。校外の研修会で学んだことも学年会や部会の中で広めることができ、自分の強みを生かすことができた。</p> <p>(5年目 C 教諭・学力基盤部)</p> <p>学年の中で主務者となる役割をもつことで、積極的に学年会で発言することができている。学年主任が<u>任せる</u>ところは<u>任せてくれる</u>のでとても仕事がしやすい。</p>

以上のようなことから、部会と学年会の連動は、学年内の相互作用や新たな取組の提案・実践という価値創造の姿を生み出していると考ええる。また、共有シートやICTを活用することで、学年間の相互作用も生み出していると考ええる。

7 全体考察

教員の意識調査として、「学習指導体制に関するアンケート」を実施した。また三沢ら（2009）や小島（2020）の調査を参考に「チーム力アンケー

ト」や、リクルートマネジメントソリューションズ教員意識調査（2007）を用いて「仕事や職場での満足感アンケート」も行った。児童の意識調査としては、12月に「交換授業や合同授業のついでのアンケート」を行った。これらの結果を基に、学年のチーム力の変容についての考察を述べる。

(1) 学習指導体制による授業の実施における学年運営のマネジメントに関する考察

表 11 学習指導体制に関するアンケート結果
(第6学年) 4件法 N = 3

番号	項目 (協働性に関する項目 1.2.5.6) (学習指導に関する項目 13) (生徒指導に関する項目 19)	R5 8月	R5 12月
1	交換授業で担当している教科について、学年会の中で提案・相談・アドバイスなどができている。	3.67	3.67
2	合同授業をする前に、だれが何をおこなうのかといった役割分担や授業のねらいなどを学年会の中で話し合うことができている。	3.67	3.67
5	児童の実態や課題に応じて、学年で道徳科の学習の充実を図っている。	3.67	4.00
6	教科担当制で担当している教科について学年会の中で提案・相談・アドバイスなどができている。	4.00	4.00
13	児童が自分の考えを伝え合う時間を設定し、学び合う授業づくりをおこなっている。	3.67	3.67
19	自分の学級の児童だけでなく、他の学級の児童に対しても褒めたり励ましたりしている。	4.00	4.00

表 12 チーム力アンケート結果
(第6学年) 4件法 N = 3

番号	項目 (目的共有に関する項目 3) (相互作用に関する項目 21・24) (価値創造に関する項目 31)	R5 8月	R5 12月
3	学年会で自分の学級の児童の課題を伝えたり、他の学級の児童の課題を共有したりしながら、一人に対処せずに組織的に対応している。	4.00	4.00
21	仕事の仕方や仕事で困ったことについて、学年会で相談したり、他のメンバーからの相談に答えたりしている。	4.00	4.00
24	(ベテラン教員)学習指導や生徒指導などの仕方について、指導や助言をしたほうがよいメンバーがいたらそれを本人に伝えることができる。 (若年教員)学習や生徒指導などの仕方について、学年のメンバーからの的確に指導や助言を得ることができる。	3.67	4.00
31	各学級のよさや課題をみつけ、学年内で共有したり、改善案を出したりして、自分の学級や学年の取組に生かしている。	3.67	3.67

学習指導の体制づくりと学年会の運営改善を行ったことで、授業について学年会で話し合い授業の充実を図ることができ（表11項目1・2・5・6）学年の児童の課題を共有し合う目的共有の姿につながったと考える（表12項目3）。また、学年会の中で授業の提案・相談・アドバイスを行ったことは、担当者任せにせずに相談し合ったり、的確な指導や助言を得たりといった相互作用を生み出したといえる（表12項目21・24）。さらに互いの学級経営のよさや課題に気付くことができ、価値創造の姿が生み出されたと考える（表12項目31）。このことから、学年チーム力が高まったことが分かったと共に、そのことが授業改善や学級を超

えた児童理解にもつながっていることが分かる（表11項目13・19）。その結果、表13の「交換授業や合同授業についてのアンケート」の児童の記述内容にあるように、児童に分かりやすい授業や、様々な友達や教師とつながることができる安心感といった、児童の学力面、生徒指導面によい影響を及ぼしていることが明らかになった。

表 13 アンケートにおける児童の記述内容
(一部抜粋)

・交換授業では、楽しく、おもしろく、詳しく教えてもらえるから分かりやすい。
・他のクラスの先生ともたくさん話ができる。
・合同授業では、他のクラスの人も学べて楽しい。いろいろな意見を聞くことができ、自分の考えを深めることもできる。
・合同授業だと3人先生がいるので、分からなくなったらすぐに教えてくれる。

(2) 学年協働体制における学年運営のマネジメントに関する考察

表 14 チーム力アンケート結果
(第6学年) 4件法 N = 3

番号	項目 (目的共有に関する項目 1.8) (相互作用に関する項目 12.23) (価値創造に関する項目 29.30)	R5 8月	R5 12月
1	学年経営案の作成は互いに意見を述べながら、学年のメンバーと一緒に作成している。	3.33	4.00
8	学年のメンバーの役割と責任を明確にしたり、学年の中での自分の役割と責任を理解したりしている。	4.00	4.00
12	学年会では全員が発言できるように工夫したり、思ったことを自由に発言したりすることができる。	4.00	4.00
23	学年のメンバーの知識や技術の向上のために、自分の強みを生かしてアドバイスしたり提案したりしている。	3.67	4.00
29	状況に応じて学年目標とその計画を見直している。	3.33	4.00
30	学年経営案を定期的に振り返り、成果と課題を考え改善している。	3.00	3.67

まず、学年経営案の活用を推進を図ったことは学年目標や取組を共有する目的共有の姿をもたらした（表14項目1）と共に、学年会で改善案を協議することから価値創造の姿を生み出したと考える（表14項目30）。次に3部会の体制づくりを行い、学年のすべての構成員を主務者としたことは、役割や責任を理解する目的共有の姿につながったと考える（表14項目8）。また、そのことが自分の強みを生かしてアドバイスしたり提案したりする相互作用の姿を生み出したといえる（表14項目23）。さらに、部会と学年会との連動を図ったことは、経験年数に関わらず自由に発言できる相互作用の姿や（表14項目12）、学年目標達成のための取組を行っていくとする価値創造の姿につながったといえる（表14項目29）。

表 15 は 第 6 学年のチーム力アンケートの目的共有、相互作用、価値創造のすべての項目を集計した結果である。また、他学年（1～5 年生及び特別支援学級）の集計結果は、表 16 の通りである。

表 15 第6学年チーム力アンケート集計結果 4 件法 N = 3

項目	6 学年	
	R5 年 8 月	R5 年 12 月
目的共有	3.73	3.82
相互作用	3.85	4.00
価値創造	3.67	3.70

表 16 他学年のチーム力アンケート集計結果 4 件法 1～5 年 N = 3 特別支援学級 N = 6

項目	A 学年		B 学年		C 学年	
	R5 年 8 月	R5 年 12 月	R5 年 8 月	R5 年 12 月	R4 年 12 月	R5 年 12 月
目的共有	3.00	3.15	3.33	3.76	3.42	3.97
相互作用	3.03	3.10	3.67	3.79	3.49	3.92
価値創造	2.89	3.04	3.44	3.74	3.41	3.89

項目	D 学年		E 学年		F 学年	
	R5 年 8 月	R5 年 12 月	R5 年 8 月	R5 年 12 月	R5 年 8 月	R5 年 12 月
目的共有	3.30	3.82	3.24	3.36	2.89	3.23
相互作用	3.67	3.79	3.51	3.74	3.06	3.36
価値創造	3.22	3.70	3.33	3.44	2.93	3.20

表 15 の結果から、第 6 学年は、8 月、12 月とも目的共有、相互作用、価値創造のすべてにおいて非常に高い数値結果になっている。また、8 月に比べ、さらに 12 月の数値の伸びも見られることから学年のチーム力が育っていることが分かる。また、表 16 の他学年の結果においても、すべての学年で 8 月に比べ 12 月は数値の伸びが見られる。このことから、3 部会や進捗状況報告会で第 6 学年の実践を中心に互いの学年の実践のよさを共有したことは、すべての学年のチーム力向上につながったことが分かる。

さらに、図 6 は第 6 学年の「仕事や職場での満足感アンケート」の結果である。全員が「他の教

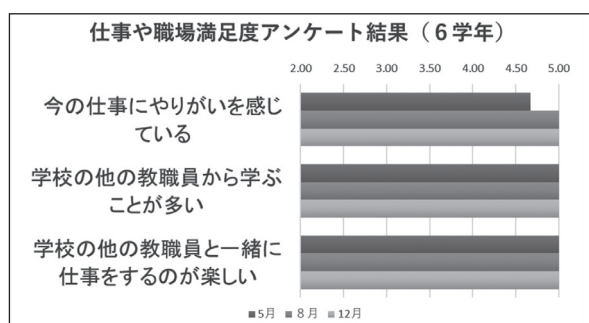


図 6 仕事や職場での満足感アンケート結果 5 件法 N = 3

職員から学ぶことが多く、一緒に仕事をするのが楽しい」と感じている。そのことが仕事のやりがい感にもつながっていると考える。このことから学年のチーム力の向上と心理的安全性の確保は深く関連していることが明らかになった。

8 成果と課題

【成果】

- 学年協働体制の仕組みづくりを行ったことで、構成員による主体的で協働的な学年運営が展開され、学年のチーム力を育てることができた。
- 学年経営案を中核にした学年運営のマネジメントを行ったことで、構成員が目的を共有し、相互補完しながら学年実践や評価・改善を行いよりよい学年実践へつなげることができた。

【課題】

- 学年の内部構成員だけではなく、担外教員や学校支援員、外部機関などとの連携を強化し、学校全体のチーム力の向上を図る必要がある。

主な引用文献・参考文献

- 1) 文部科学省 2022 中央教育審議会「令和の日本型学校教育」を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について～「新たな教師の学びの姿」の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成～（答申）22 頁
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/079/sonota/1412985_00004.htm（2023 年 10 月 7 日確認）
 - 2) 同上 25 頁
 - 3) 福岡県教育センター 2016 学校変革の決める学校チーム化を目指すミドルリーダー 20 の行動様式 7 頁
 - 4) 曾余田浩史 2010 学校の組織力とは何かー組織論・経営思想の展開を通してー日本経営学会紀要 52 2 頁
 - 5) 元兼正浩 2010 次世代スクールリーダーの条件 ぎょうせい 12 頁
- 小島章稔 2020 学年の「チームワーク」を高める組織運営に関する研究ー学年経営案を具現化するためのプロジェクトの取組を通してー福岡教育大学大学院教職実践専攻年報第 10 号 219-226 頁
- 三沢良 2009 看護師チームのチームワーク測定尺度の作成 社会心理学研究第 24 号巻第 3 巻 219-232 頁
- 原田将嗣 2023 最高のチームはみんな使っている心理的安全性をつくる言葉 55 82-112 頁